

〇 総括コメント「日中関係と東亜同文書院」

栗田 尚 弥 (国学院大学講師)

【座長】 それでは時間がだいぶ押しておりますので、引き続きコメントのほうをお願いしたいと思います。コメンテーターは栗田尚弥先生です。昨年も日中のシンポジウムについて栗田先生にお願いいたしました。特に栗田先生は幅広く東亜同文書院および東亜同文会の研究をしておられまして、いろいろな研究書を出しておられます。そういう点で全体的なコメントをお願いしたいところです。では早速お願いいたします。

【栗田】 栗田でございます。今、武井先生のほうから東亜同文会と武井先生が同じ誕生日であるとお聞きしましたが、実は私はきのう11月1日が誕生日でございました。ですから同文会も武井先生も私も、同じ蠟座でございます。蠟座の結び付きは強いのかなというふうに思っております。今回、このコメンテーターをお引き受けすることになりましたが、錚々たる方々へのコメントということで、私でよろしいのかなということ、今でも考えているわけなんです。覚悟を決めまして私なりのコメントを加えさせていただきたいと思っております。皆様のお手元に私が作った簡単な要旨と参考資料がございますが、これは事前に先生方のご報告を聞いて作成したものではなく、藤田先生からコメンテーターのお話を頂いた時に、えらいことになったということで、1週間ぐらいアルコールを絶つという荒行のうえ、先生方のご論文や御本を拝読し、私なりに頭の中を整理しようとしたメモ程度のものでございます。

本論に入らせていただきます。ご報告の順にコメントを力不足ながら加えさせていただきたいと思っております。まず阿部先生のご報告ですが、皆様ご存じの通り阿部先生は教育史の分野の泰斗でいらっしゃる。従って、私如きがコメントを加

えられる立場ではございませんが、私なりの感想ということでしゃべらせていただきます。

私が10数年前、東亜同文書院に関する本を書きました時には、日本と中国の間のジレンマ、あるいは理念と現実との間のジレンマというところに視点を置いて書いたつもりでございます。今日の阿部先生のご報告を聞きまして、東亜同文会が中国に作った漢口同文書院等の学校につきまして、経営者と言いますか学校関係者と言いますか、こういう方々が、中国側の教育権回収運動、あるいは国民党の党化教育の中で、いかに学校を存続させていくか、そして日本と中国との間でいかに理念を貫くかということで非常に苦勞されたということ、改めて感銘深く感じた次第でございます。

今日のご報告は20年代の学校ということでございますが、1931年代の満洲事変以降15年戦争の時代に入って日本と中国の関係が悪化していく中で、東亜同文書院など東亜同文会経営の学校のみならず、海外に学校を持っている教育団体としては、中国の人を教育する時に日本思想への共鳴者を作らなきゃいけないという圧力に耐えなければいけないわけです。東亜同文会経営の在中國的諸学校の教師がいかなる思いで、あるいはいかなる施策をもってこれに対応しようとしたのかというようなことを、また後ほどお教えいただければと思います。

それと細かいことですが、阿部先生がお示しになられた資料の中の、全国教育会連合会第10年次会議「取締外人国内弁理教育事業案」を拝読いたしまして、不思議なことに、と言うと失礼になると思いますが、東亜同文書院の根津一院長がほぼ同じようなことをおっしゃっています。その一部は本日の私の参考資料①（「東亜同文会大正3年春季大会における根津一の報告」）

でもお示ししておきましたが、要するに「学校教育というのはそれぞれの文化的背景があるのだから、簡単に外国教育を受け入れていいものかどうか」というようなことを根津院長がおっしゃっている。中国の教育者と根津院長の、ここら辺の共通の認識というのはどこから出てくるのかな、ということをお話から感じました。

私事になりますけれども、ピーター・ドウス先生と小林英夫先生が編集された『帝国という幻想 - 「大東亜共栄圏」の思想と現実』という本が青木書店から1998年に出ました。その本の中で私とジョージア州立大学のダグラス・レイノルズ先生が書いたもの（レイノルズ「東亜同文書院とキリスト教ミッション・スクール」、栗田「引き裂かれたアイデンティティ」）が論争に近い形になりました。お読みいただいた方もいらっしゃると思いますが、レイノルズ先生は要するに「ミッションスクールというのは中国に思想的な、キリスト教的な遺産を残したが、東亜同文書院はそういうものは残さなかった」というようなことを書かれました。私は、悪い言い方ですが、レイノルズ先生の論は「アメリカのミッションスクール万々歳」というような印象を受けましたので、それに反駁するようなものを書いたわけです。

今日、阿部先生のご報告をお聞きして、私もレイノルズ先生も、結局はアメリカ側の資料、あるいは日本側の資料のみから東亜同文会なり同文書院を分析しているだけであった、と痛切に感じました。分析「される側」というのはおかしいですけれども、当事者であるアメリカ、日本、そしてもう1人の当事者である中国、この中国の視点がレイノルズ・栗田論争では欠如していたなど、強く反省せざるを得ません。これは歴史全般に言えることで、日本の戦後改革についても、いわゆる「括弧付きの民主化」をする側とされる側とでは当然認識が違うんじゃないかということは左右両方から言われておりますが、実は日本もアメリカも、対外的な教育を考える場合に、こういうまさ

に「される側の視点」というのが欠落している。そういう意味でも、阿部先生の今日のご報告は改めて目を開かされる思いをもってお聞きいたしました。

その次の松田先生のご報告ですが、私も前から気になっていたことですが、東亜同文会の弘前支部というのは全国的にも非常に早く作られているんですね。そして、人脈的にも山田良政、笹森儀助、陸羯南という具合に、こういう言い方は妥当ではないんですが青森閥・青森人脈というのがそこにある。それと弘前ではないんですが、私がちょっと興味を持っている、1960年代までご存命だったノンキャリアの外交官で米内山庸夫という方がいらっしゃいます。中国エンサイクロペディアみたいな方で、中国に関しては、政治、経済、文学、さらには自然科学まであらゆる分野に関して著作を書かれています。しかし、なぜか1945年以降は何も言わなくなってしまうんですが、この方も弘前ではないんですが青森のご出身です。そういう点から東亜同文会における青森は何なんだろうなという疑問を前から持っておりました。それが今日のご報告で、近衛家との関係、あるいは熊本との関係ということをお話になって、なるほどそうなのかというような思いに駆られました。また今日のご報告にありました城津学堂、これはご報告の中でお名前を出されました稲葉先生以外にはあまりおやりになっておられない分野なので、その意味でも非常に面白いご報告と思われました。

私の参考資料②の中にもちょっと付けておきましたけれども、城津学堂の趣意書、あるいは規則の中に、「特別科として韓国固有の文書を兼修せしむ」とあります。要するに後に問題になるような皇民化教育ではなく、やはり韓国・朝鮮の人のアイデンティティー教育も行なう。これはその後の日本の韓国における学校にはなかった特徴だと思います。それとこの趣意書のなかには、「往昔我国人文未だ開けず韓国の文化既に開けたる時に

当りてや韓国人士我国に渡来し文学芸術を教へて我を教導したること少からざるなり、今や韓国の文運衰退せんとする時に当て…」ということが書いてあります。要するに「かつては日本よりも優れた国であっていろんなことを伝えてくれたけれども現在は…」というようなことです。先ほどの『帝国という幻想』の中でピーター・ドウス先生が、日本の対韓政策についてのご論文（『朝鮮観の形成』）で、明治期の日本人の対朝鮮観の基本にあるのは同じ民族であるという意識であると指摘されています。ドウス先生は、この同族意識が、「同じ民族なのになぜこんなのか」という方向と「同じ民族だから救ってやらなきゃいけない」という方向に分かれたとおっしゃっています。しかし、この城津学堂の趣意書を見るとどちらでもない。かつての朝鮮は1つの進んだ文明国であったと述べている。要するに朝鮮は1個の国であるという意識で趣意書を書いています。そういう点からも城津学堂は非常に面白いと思いますので、これはぜひ松田先生にご研究を続けていただきたいというふうに思っております。

その次の水谷先生のご報告なのですが、私は常にくだらない不謹慎なことを考える癖がありまして、中央の共産党のトップまで出世した沙文漢さんが学校にはほとんど出なかった、というようなお話を聞くと、自分の学生時代を振り返ってみても試験の前に俺のノートを丸写しにコピーしていたやつの方が俺より出世しているじゃないかと、そういうことを考えたりしました。中国も日本も、あるいは古い時代も今も、やっぱりこの鉄則は変わらんのかなと…。ご報告自体はほとんどなたもやられていない分野のところですね。私はかつて『上海東亜同文書院-日中を架けんとした男たち-』の中で、ある学校を知るためにはどういった人材を輩出したかを研究することも重要であると書きました。当時は東亜同文書院に関しても、その部分の研究がイマイチじゃないかと書いたわけですが、同じことが中華学生部に関しても

言えるわけです。そういう意味で中華学生部の人達がその後いかに中国で活躍されたか、あるいは日本と中国の間で活躍され苦しまれたか、そういうことを明らかにするのは非常に大きな意義があることだと思います。単に彼らが何をやったかということではなく、私も参考資料③の中で「反帝国主義の意識を持ちながらも、その身を『日本帝国主義の学校』によって守られているという、中国人学生・教師のアンビバレンツな心情は自ずと日本人学生にも伝わったことであろう」というように、昔『東亜同文会史昭和編』に書いた部分を引用させていただきましたけれども、水谷先生のご報告の中にありました「自分達の意思を通すためには日本人の学校で学ばなきゃいけない」という彼らの忸怩たる思いが日本人学生にも伝わって、1つの書院の思想というものを作る大きな要因になっているのではないかと思います。その点からも、この中華学生部の研究はぜひ続けていっていただきたいなと思っております。

そして、その次の武井先生のご報告。この分野もほとんど今まで研究者がいらっしゃらない、いやゼロと言ってもいい分野だと思います。まさに新たな光を与えられたご報告です。最後に武井先生がストライキのことをおっしゃっていたんですが、実は私が一番関心があったのはその部分で、今日の参考資料④にも『東亜同文会史』の中からちょっと引用しておきました。これはどういうことかと言いますと、東亜同文書院の農工科廃止をめぐる学生ストライキで、新聞社の幾つかが、これは反根津運動であるというふうに報道したことに対して、ストライキをやっている当の学生たちが、「いやそんなことはない。私達は根津さんを尊敬しているんだ。だからこういう記事はやめてくれ」というようなことを書いた。それを引用したわけです。このエピソードを見てもわかるとおり、東亜同文会の歴史を見る上で農工科の問題というのは無視できません。武井先生の農工科の研究のこの後のご発展を期待したいわけです。あと、



当時の学生さんが、何のためにこの学科はあるのかということについて、「日支資本家にいろいろなものを提供する。それから両国国民の福利を図る」というようなこと言っている、というご指摘も今日のご報告の中にあっただと思います。1915年に対華21ヶ条の要求が出て日中関係がどんどん悪くなっていく中において、日本だけではなく日支（日本と中国）両方の利益を図るというスタンスを学生が持っていたことは、やはり東亜同文書院の持つ意味を改めて認識させてくれるものではないかなと思っています。

ちなみに根津院長は対華21ヶ条に対しては大反対でありまして、「こういうことをやっているといずれ日本に悪いものが返ってきますよ」ということを書いています。時は第1次大戦の最中ですが、「とにかく仕事が終わったら日本軍は即青島から撤収すべし」というようなことをおっしゃっているわけです。この当時の根津さんの言葉と学生さんの言っていることが、私の頭の中では重なるわけです。

武井先生は農工科廃止以降の動き、上海工業研究所のことについて触れていらっしゃいますが、結局これは潰れてしまいます。参考資料④のほうにちょっと括弧で書いておきましたけれども、1938年（昭和13年）に東亜同文会が新たな学校を作るという計画を立てておりますが、その1つとして産業の専門家を養成するというので、東亜同文産業学院の計画が入っております。理念的には農工科を継いだものかという気もしますが、時代背景がだいぶ違いますので、そこら辺の相違はどうなっているかというようなことも、いずれ明らかにしていただきたいなと思っております。

以上、4人の方のご報告について、私なりの非常に低次元のコメントを加えさせていただきましたが、この場を借りて、最近ちょっと興味あるご論文を拝見いたしましたので、私の要旨の6番目に書いておきました。石田卓生先生の「東亜同

文書院とキリスト教」というご論文です。去年の「オープン・リサーチ・センター年報」No. 2に書いていらっしゃいます。先ほどのレイノルズ先生と私の論争（向こうは「論争」ではないと思っているかも知れませんが）の中で、レイノルズ先生は「思想的なものは東亜同文書院は何も残さなかった」ということを書いていらっしゃいます。私は「同文書院はビジネススクールだから、その視点から見るのはおかしいんじゃないの」という反論をしました。先ほど水谷先生から、中国の方の反キリスト教の拠点が東亜同文書院にあったというご報告をいただき、その中で坂本義孝先生のお名前が出たわけですが、石田先生は「やはり同文書院の中にもある種のキリスト教的な精神があるのではないか。さらに陽明学（根津校長は陽明学に非常に造詣が深い）とキリスト教との関係、これも無視できないんじゃないか」という視点から、東亜同文書院におけるキリスト教ということを書いていらっしゃいます。

アメリカやその他の国がキリスト教を使って中国への侵出を計っていたことを、根津院長は非常に懸念していたと先ほど申し上げましたけれども、根津院長は決してキリスト教自体を軽蔑・排斥するという方ではなく、実はマルクス主義に対しても一定の理解を持っていらっしゃいます。ただ書かれたものを拝見しますと、いろいろな民族・国家に或る思想が出てくるには、その国家の持っている歴史的な背景、必然性がある。だから無闇に外国の思想を入れた場合そこに大きな問題があるのではないかという視点で、たとえばアメリカのミッション系スクールの進出なんかを懸念されているんですね。実際、ミッション系スクールの経営者はとにかくとして、時の米政府が中国教化のためにクリスチャンを使ったということは否定できない事実ですから、そういう政策としてのキリスト教は非常に根津院長は警戒しますがけれども、キリスト教自体はやはりその国の1つの文化から出てきたものだという理解はされています。

ですから誤解しないでいただきたいのは、政策としてのキリスト教は根津院長は懸念しますが、思想としてのキリスト教に関してはまた別の見解を持っていらっしゃるということです。そういう意味でキリスト教というものが、陽明学とも合致するところがあるのではないかと、石田先生は思想史的な観点から書かれています。

実は私も20代の大学院生の頃、足尾鉍毒事件の田中正造について書いた際に、彼はクリスチャンで有名ですが、やはり基礎には陽明学があったのではないかと指摘したことがございます（『田中正造と陽明学』『田中正造の世界』第3号・1985年）。これは当時の田中正造を研究されている方からコテンコテンにやられましたけれども…。そういう思いもあって、去年のシンポジウム（『日中研究者による東亜同文書院研究』）の際、東亜同文書院を見る場合思想史的な視点も必要なんじゃないかということ、武井先生ともお話ししましたが、まさにそういう思想史の観点から同文書院を見ていこうという若い方が出てきたというのは、非常に喜ばしいことだと思います。

いろいろなことを言わせていただきましたけれども、最後に私なりの東亜同文会・同文書院に対する思いをしゃべらせていただきます。私が『上海東亜同文書院』を書いたのは1993年でした。もう15年も前になります。その当時はもちろん阿部先生のような素晴らしいご論文を発表されている方もいらっしゃいましたが、一方では東亜同文書院とか東亜同文会を研究するのはけしからんというような声もあって、私も同期の人間から「お前はいつから帝国主義の手先になったんだ」と言われたのを覚えています。私も正直最初の頃はそういう印象を持っていた時期がありますけれども、やはり資料を具体的に見ていきますと、「とんでもないよ」と言わざるを得ない。それで、日中の中で苦しんだ人々のことを解明しなくてはこれからの日中関係は分析できないんじゃないか、という視点でこの本を書いたわけです。

最近でもインターネットの2チャンネルを見ますと、たぶん私の授業を取った学生だと思いますが、「栗田って右翼だろ」と書いている人もいます。私は進歩派のつもりなんですけれども…。そういうことも書かれたりしております。まあ15年前はそういう状況でした。

明治大学の学長をやられた木村礎先生という、歴史学（特に地方史）で有名な大先生がいらっしゃいます。私がつい最近読んだこの先生の自伝『戦前・戦後を歩く』（日本経済評論社）の中に、「歴史家は神ではないのだから、裁断には慎重でなければいけない。主題の選択は自由にやるより他なく、そこに彼の現代的立場はすでに表明されている。それから後はせいぜい客観的、実証的、かつ謙虚にやるべきだろう」と書かれています。この本が書かれたのは1994年で、私が落ち込んでいた翌年です。その時に読んでいたら私はもうちょっとまともな人間になったと思うので、もっと早くこの本に出会ってれば良かったと思います。要するに歴史を語る場合には、木村先生の言葉をお借りすれば「客観的、実証的、かつ謙虚に」やる必要があると思います。僭越ですが今日ご報告になられた先生方はまさにこの歴史の大鉄則、歴史学者としての原点をきちんと守られていて、素晴らしいご報告だったと思います。私も先ほどのレイノルズ先生と論争まがいにあった時、言い訳がましくこういうことを書いています。「結果のみからある団体や人物を断罪することは容易である。だがその団体なり人物なりがいかなる理念や精神・思想を有し、それをいかようにして実現しようとしたのか、さらには実現する過程において現実とのジレンマにどのように直面し、それをいかに止揚せんとしたのか、これを知ることなくして団体や人物を歴史上に位置づけることは不可能である」と。その気持ちは今でも変わりはありません。その私のスタンスからいたしましても、今日のご報告は「我が意を得たり」というものでございました。



最後になりますが、東亜同文会なり東亜同文書院に関係した人々のアジアに対する意識の類型化（と言うと失礼ですが、どういうパターンなんだろうということ）を簡単にしゃべらせていただきます。これは私のオリジナルではなく、立教大学の先生でいらした栗原彬先生という有名な社会学者の方が、日本人のアジアへの関心型というのを7つの類型に分けていらっしゃいます。贖罪型・郷愁型・偏見型・教義型というような形で分けられていらっしゃいますが、その中で実存型ということをおっしゃっています。それはどういうものかと言うと、「西欧帝国主義の追従者と、アジアナショナリズムの先駆者、あるいは同種の対立項のいずれか一方を消去して豪傑君（中江兆民の『三酔人経綸問答』に出てくる人物。とにかくアジアなんか侵略してしまえというようなタイプ－栗田注）、あるいは洋学紳士（理想論だけを説くタイプ－同）の道につくのではなく、対立項の葛藤・緊張を保ちつつ、痛みを失わないことで透徹した認識者たり得る」、これが実存型認識だとおっしゃっています。私は東亜同文会・同文書院というのはこの実存型に近いのではないかと思います。常に理念と現実との間にあってその葛藤・ジレンマに苦しみながら、それをどうにかプラスの方向に持っていこうとする。外に飛び出て批判するのは簡単ですけども、内部にいてその葛藤の中でどうにか良い方向に持っていこうするのは大変なことだと思います。東亜同文会・同文書院に関係した人々はそういう実存型認識に属する人々ではないかと思っています。

1945年（昭和20年）の呉羽分校の自説録（閉校に際しての学生に対するアンケートをまとめたもの）をたまたま数年前に目にしました。CさんDさんというふうに原文自体仮名になっていますが、たとえば学生Dさんは「われわれ書院に学ぶ者は少なくとも感情的には支那四億の民の友であった。しかしながらかつてのわれわれの先輩は、実際的には日本資本主義経済の大陸進出の尖兵と

して役割を果たしたのではなかったか。そしてそれと相応した日本軍閥の崩壊と共に、書院生の過去に行なった対支政策に厳しい批判を向けると同時に、一刻も速やかに書院の将来およびその使命たるものを明らかにしていただきたい」と書いているんですね。理念と現実のジレンマ、これはまさに東亜同文会なり東亜同文書院の、特に1920年代後半以降のスタンスではないかと思っています。

全然分野の違う例えを出して、特に東亜同文書院出身の方には申し訳ないんですが、フルトヴェングラーという有名なドイツの指揮者がいらっしゃいました。ナチが政権を取ったあと、反ナチの指揮者がどんどん海外に流出（亡命）していくわけですね。あとに残ったのがヒットラーの子分みたいと言われていたカラヤンとか、そういう人々なんですけど、フルトヴェングラーは最後まで祖国に留まる。それに対して戦後さまざまな批判が寄せられるわけです。これは丸山真男先生か誰かがおっしゃっていたと思うんですが、「そこに留まることが彼にとっては必要だった。オーストリアやドイツに留まって民族の音楽を守る為には、どんな立場にあっても政策の具になることなく、現場にいて自分のスタンスを守り抜く人物が必要であった。まさにフルトヴェングラーは自らをその立場に置いた人物であった」と…。まあ芸術の分野と学校あるいは団体は同一に論じられませんが、私はやはり東亜同文会なり東亜同文書院というのは、ある種フルトヴェングラー的精神を持った団体であり学校ではなかったかというふうに思っております。少し長くなってしまいました。どうもありがとうございました。

日中関係と東亜同文書院

(レジュメ)

栗田尚弥(コメンテーター)

1 はじめに—このシンポジウムの意義—

○東亜同文会の中心事業である教育に焦点

2 阿部洋「中国における東亜同文化会の学校教育」

3 松田修一「笹森儀助と朝鮮における教育活動」

4 水谷尚子「東亜同文書院中華学生部の展開と歴史的役割」

5 武井義和「東亜同文書院に付設された農工科をめぐる」

(6 石田卓生「東亜同文書院とキリスト教」『オープンリサーチセンター年報』NO2)

7 最後に

○私の言いたいことは、歴史家は必然的に現代的立場に立っているのだから、それを自覚し、その立場を過去に向って野放図にたれ流ししない方がいい、ということである。過去は本質的にそれ以前の過去によって規定されているのであって、現代そのものが過去そのものを規定することは絶対にあり得ない。したがって、それぞれの現代を生きる歴史家が過去を裁断するのは、本質的にはおかしいのである。

おかしいのではあるが、歴史家たちはこれまでそれをやってきたし、これからもやるだろう(私も同じである)。それは、彼らが現代を生きる人間だからである。しかしながら歴史家は神ではないのだから、過去の裁断には慎重でなければならない。主題の選択は自由にやるより他なく、そこに彼の現代的立場はすでに表明されている。それから後は精々客観的・実証的かつ謙虚にやるべきであろう。現代的立場を過去に向って無自覚にあるいは逆に作為的にたれ流すことは歴史叙述を宣伝文に化することである。そうした先例はすでに数多くある。もとより完全にはできないことだが、歴史家はその現代的立場を抑制しつつ謙虚に過去に相対すべきであろう。過去に対する便宜主義と傲慢は歴史家にとって最大の悪徳である。

(木村礎「戦前・戦後を歩く」日本経済評論社・1994年)

○〈結果〉のみからある団体や人物を断罪することは容易である。だが、その団体なり人物なりがいかなる理念や精神、思想を有し、それをいかようにして実現しようとしたのか、さらには、実現せんとする過程において現実とのジレンマにどのように直面し、それをいかに止揚せんとしたのか、これを知ることなくして団体や人物を歴史上に位置づけることは不可能である。

(拙稿「引き裂かれたアイデンティティ—東亜同文書院の精神的考察—」ピーター・ドウス、小林英夫編『帝国という幻

想 - 「大東亜共栄圏の思想と現実」 - 青木書店・1998年)

○ これら種々のタイプの人々（東亜同文会に集った人々）を結びつけていたものは何なのだろうか。それは中国を始めとするアジア諸国に対する「実存型」関心である。栗原彬氏によれば、日本人のアジアへの関心型は、(1)「贖罪型」、(2)「郷愁型」、(3)「偏見型」、(4)「教義型」、(5)「利害型」、(6)「実存型」、(7)「自律型」の七つに分けられるという（栗原彬「日本人のアジア像」『歴史とアイデンティティ』二一～二四六頁）。そして「実存型」とは、「権力をもたぬ劣弱な個に立脚して、己れの存在証明を求める過程それ自体が、抑圧されている第三世界とりわけアジアの人々との間に連帯感を見出す過程に一致」させていく関心型である。そしてこの関心型は、「『西欧帝国生成の追従者』と『アジア・ナショナリズムの先駆者あるいは同志』の対立項のいずれか一方を消去して『豪傑君』あるいは『洋学紳士』の道に就くのではなく、対立頂の葛藤・緊張を保つ痛みを失わないことで透徹した認識者たりうる」ことが出来る。東亜同文会の会員を結びつけていたものは、この「実存型」関心である。

（拙稿「解説 明治・大正期における東亜同文会の活動」東亜文化研究所『東亜同文会史』）

○日本と中国の狭間で-

重慶が同文書院を目してて特務機関員養成所なりと宣伝したと聞いて居ります。成程書院生は血書までして寧波、^(ママ)□□等への軍属として参加し、或ひは支那研究の為にあらゆる努力を払って得た情報も悪く軍・財閥に依って帝国国策遂行の力として利用された。真に東亜を思つての上申・献策も入れられず、書院自体第三者の客観的立場からみれば日本軍の特務機関養成所と思はれるのも無理はなかったと思ひます。

（『呉羽分校学生課自詮録』より、学生C）

我々書院に学ぶ者は少くとも感情的には支那四億の民の友であった。而しながらかつての我々の先輩は実際的には日本資本主義経済の大陸進出の尖兵としての役割を果たしたのではなかったか。そしてそれと相応した日本軍閥の崩壊と共に書院生の過去に行った対支政策に威しい批判を向けると同時に一刻も速やかに書院の将来及び其の使命たるものを明らかにしていただきたい。

（同上、学生D）

参考資料

①

…亜米利加の風が支那の社会に段々と拡まると、其結果はどうなるかと云ふと、名教と、相容れないことになりはせぬか。支那の社会の存立して居るのは名教の御蔭で其情力の為である。其事は既に諸君は御承知であろうが、若それに困り社会に根本的変動が起りましたならば、随分危険なことではなからうか

（東亜同文会大正3年春季大会における根津一の報告、東亜文化研究所『東亜同文会史』）

②

…一半島国を以て文学夙に開け礼楽早く備り泰西諸邦の未だ野蛮蒙昧の時に当りて已に文明の光輝を發揚したり何ぞ世界の先進国と云はざる可けんや

建国此の如く古く文運此の如く隆盛なるもの実に他国よりも先進したるの国なり 此国現今の形勢を顧見せよ国勢萎微として文学振はず遠く後進諸邦の後に瞠若として昔日の旺盛なる面影だもなきものはれ何に山て然るかと云はゞ他莫し他邦は攷々として文学を勉励し教育を奨して不居不撓なるに此韓国は独り倦怠し其進歩を中沮したるに因るもの豈に韓国の為に慨歎なる事ならずや

(中略)

日韓清の三国は地理上を以て言へば実に唇齒輔車の関係を有し史記上より言へば実に同種同文同俗なる同胞ならずや

往昔我国人文未だ開けず韓国の文化既に開けたる時に当りてや韓国人士我国に渡来し文学芸術を教へ以て我を教導したること少からざるなり、今や韓国の文運衰退せんとする時に当て吾人来て教へ以て与に文明の徳沢に浴せしめ相携へて以て世界上に雄飛せんと欲するものは亦是唇齒輔車の関係あるものを互に全ふせんと欲するが故なり否同胞の信義を重ざるが故なり

(中略)

故に曰く教育は人智を啓発し国家を富強ならしむる基礎なりと諸子よ思考して文を溝し学を究め以て何時も倦怠すべからざるなり

城津学堂規則

第一款 総則

第一条 本学堂ハ城津学堂ト称シ大韓帝国咸鏡道城津ニ設置ス

第二条 本学堂ハ東亜同文会ノ管轄ニ属ス

第三条 本学堂ハ韓語及日本語ヲ以テ普通学科ヲ教授ス

第四条 本学堂ハ特別科トシテ韓国固有ノ文書ヲ兼修セシム

(以下略)

(「城津学堂趣旨」東亜文化研究所『東亜同文会史』)

③

中華学生部の学生は、本科においては日本人学生と共同授業を受けることになっていた。昭和三年からは、中国人学生と日本人学生は寮内において起臥を共にすることになった。また、当然のことながら、書院で教鞭を取る中国人教師の教も多かった。そしてその中には公然と反蒋介石、反帝国主義を口にするものもあった。東亜同文書院の日本人学生は国内の学生よりもはるかに、中国人学生・教師と接する機会が多かったのである。日本人学生は、授業の合間に、あるいは中国問題研究会などを通じて、例えば、「われわれの国では外国人が勝手にやって来て、われわれの利益も習慣も無視して、彼ら自ら此国の地面に都会を作り、工場を建てるんです。そうしてわれわれはそれを見ながら、どうすることもできない」(郭沫若が谷崎潤一郎に語った言葉、丸山昇『上海物語』より)というような言葉をたびたび聞いたであろう。また、反帝国主義の意識を持ちながらも、その身を「日本帝国主義の学校」によって守られているという、中国人学生・教師のアンビバレンツな心情は自ずと日本人学生にも伝わったことであろう。

④

我等一同は書院か農工科を縮小せざるべからざる境地に立ち到たる状況に慨し日支関係の緊密なると書院責任の重大なるとを思ひ此の際大いに書院創立の趣旨を実現し世に警醒せしむるの方法に出づるの必要あるを認め学校当局に懇請して許可を得若干の時日を費して議を凝し候次第にて…

(中略)

若し夫れ新旧思想の衝突と云ひ或は在院生は院長として新人物を求むる心あるに因るものの如しと云ふに至つては何等書院の精神を知らざる者の揣摩臆測にして固より一顧に値ひせざる儀と存候我れ等一同は熱誠を以て院長の教訓に感佩する者にして現在の新旧思想問題等に撼揺せられ世人の所謂新人物を求めんとするか如き軽薄なる行動は断して無之候へ共恐らくは事情に暗き世人の誤解を生するなきを保せず茲に我書院並に我等学生の名譽の爲めに敢て事件の真相を闡明し社会一部の疑惑を解かんと欲する次第に御座候

(農工科廃止によるストライキについての新聞報道に対する同文書院学生会の反駁書、東亜文化研究所〔東亜同文会史〕)

(昭和13年1月、東亜同文会は「支那ノ新情勢ニ応ジ」、「東亜文化ノ復興顕揚、資源開発等、東亜恒久平和確立ノ枢軸タルベキ諸政策ノ達成ニ参画シ、ソノ実現ニ邁進スベキ人材ヲ育成センコト期シ」て、中国国内に既設の三学校(東亜同文書院、中日学院、江漢中学校)のほか、「東亜文化復興ニ開スル教育機関」である東亜同文大学、「資源開発ニ関スル教育機関」である東亜同文農工業学院と東亜同文産業学院、「民族親和ニ関スル教育機関」である東亜同文女子学院の4校を設立するための独自プランを作成したが、このうち東亜同文農工業学院と東亜同文産業学院は農工科と方向性が同じと思われるが・・・)。

【座長】 どうもありがとうございました。熱のこもったコメントをいただきました。以上で全部終わりました、会場の方のご意見を伺う時間ですが、予定の時間を過ぎております。そこでフロアのほうから、この際このことは聞いておきたいということがございましたら。よろしいでしょうか…。

そうしましたら今からリュミエールというレストランのほうで懇親会をいたします。発表者の先生方も皆さんご出席されますので、そちらのほうでまた議論を続けていただけたら幸いです。どうも長時間ありがとうございました。